

# 診心愛語で進めるスポーツ医療 —くつま整形外科医院

開院して15年になるくつま整形外科医院は一般整形外科としてスタートしているが、さまざまな活動を通じ、現在はスポーツ整形の専門医院として地域で認知されている。これまでの経緯とこれからの展望について久津間健治院長に話を聞いた。

## 地域で初めて開院した整形外科医

JR身延線市川大門駅より車で約5分、富士川大橋を渡ると山間部に位置する山梨県南巨摩郡増穂町の中心部に入る。1991年に開院したくつま整形外科医院は、橋を越えたすぐ右手にある。道路側には04年に増設したスポーツリハビリ施設があり、その裏に並んで医院がある。隣に並んだ施設の右手にある広々とした駐車場は、この地域の移動手段の中心が車であることを物語っている。日本体育協会公認スポーツドクターであり、J1リーグに所属するアルビレックス新潟のアウェイドクターを務める久津間院長は、増穂町で初めて開院した整形外科医である。

出身地での開院のきっかけは親が体調を崩したことで帰郷を決意したからだそうで、現在こそスポーツ整形外科を専門として諦っているが、開院当初は一般整形外科であった。「スポーツ医学を中心とする意図はなく、骨代謝を専門としていたことから骨粗鬆症の患者さんが来てくれるのではと思っていました」と当時を振り返る。

しかし、実際に診療にあたってみると、腰痛や膝痛などを抱える中高齢者に加え、スポーツ外傷、障害による子どもの来院も多かった。増穂町ではソフトボールをプレーする人が多く、町内で年齢別のリーグ戦

も開催されているほか、増穂商業高校では以前からバレーボールが、子どもの間では野球・サッカーが盛んでもある。また、増穂町の体育協会の要望で日本体育協会公認スポーツドクターの資格を取得し、徐々にスポーツ整形外科医として活動を広めていくこととなった。

「この地域のよいところは、悪く言えば保守

的なのですが、人の動きが少ないためそれぞれつながりを持っていることです」と久津間院長、スポーツをする子どもの診療をきっかけに祖父、祖母が、父親の診療をきっかけにスポーツ選手が来院することも多いそうだ。家族単位で患者層が広がっているほか、スポーツ選手が別の選手やその家族に医院を紹介することもあるという。

## スポーツドクターとして認知されるまで

今でこそスポーツドクターとして地域に認知されているが、それまでには長い年月が経っている。開院から数年は、あくまでも一般整形外科医としてスポーツ選手の診療に当たっていた。「指導者にとっては決してよい医師ではなかった」と言うように、「練習を控えましょう」という言葉が常套句であり、当時山梨県教育委員会の依頼で指導者に対して話をした際も「練習をやり



くつま整形外科医院外観。道路に面しているほうがスポーツリハビリ施設（写真左）

すぎる傾向にある」と強く訴えたそうだ。そのため、徐々にスポーツをする子どもの来院が減り、指導者からも反発を受けたという。

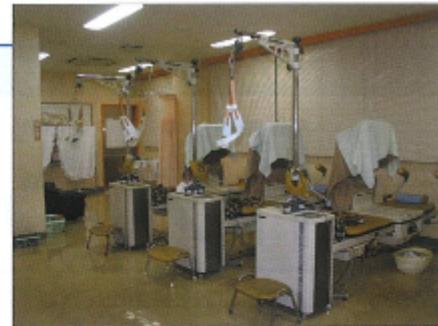
しかし、中学・高校でピークを持っていきたいと考える選手もいることなどから「指導者や選手に仲間と思ってもらえるような医師になろう」と考えを改め、そして96年に始めたのが年2回実施している講習会である。スポーツ医学を取り上げた講習会であるが、始めて2年ほどは講演のみだったため指導者があまり参加しなかったそうだ。そこで、選手・指導者と一緒にスポーツを医学として考えるという本来の目的を達成するため、99年からテーピングやストレッチなど実技を取り入れた結果、指導者が徐々に集まるようになった。指導者からの信頼も集まるようになり、一時期減ったスポーツ選手の来院が増えているといったという。



待合室。写真左手が受付



診察室



診察室奥にあるリハビリテーション室



スポーツリハビリ施設。トレッドミル、エアロバイクなどがある



スポーツリハビリ施設にあるHUR筋トレ機器



同じく同施設にある下肢筋力測定器

また、くつま整形外科医院では04年にスポーツリハビリ施設を増設しているが、当初、この増設は同年に施行された診療報酬マイナス改定を考慮して、介護保険に参入し通所リハビリテーションを始めるためであった。パワーリハビリ用のマシン導入し、キッチンや浴室も設置、建築が始まてもそのつもりだった。しかし、依然として迷いがあったことから従業員と相談し、「やっぱり私が好きなのはスポーツだ」と思い、スポーツリハビリ施設としてオープンしている。

99年にアルビレックス新潟のアウェイドクターを務めるようになったこともあり、現在は冬の選手権に出場した甲府東高校や蘿崎高校のサッカー選手、スポーツ少年団であるフォルトゥナSCやヴァンフォーレ甲府ジュニアの子どもたちも訪れるようになっている。

## 診心愛語で

### スポーツ医療と地域をつなぐ

久津問院長によると、患者の傾向として、運動のしすぎ、運動不足の二極化が進んでおり、山間部の町であるにもかかわらず、子どもの間では肥満や扁平足が増えてい

る。中高齢者ではからだのかたさが目立っており、移動手段が車中心の生活と運動不足から膝痛、腰痛も多い。これらの点からも、スポーツ医学に従事する同医院の地域での役割は今後ますます増えていくことが予測される。

久津問院長は手の外科が専門であり、毎年70近く手術を行っているが、他の部位の専門外科医が少ないと、情報を共有して地域で一環した治療を提供したいとの理由から岐阜整形外科懇話会の設立に尽力、近隣病院の賛同を得て、96年より定期的に勉強会を行っている。山梨県内には久津問院長が卒業した甲府南高校出身の医師が200名近くいるそうで、そのネットワークを活かしての活動である。

また、整形外科医の連携に加え、久津問院長は地域で活動しているトレーナー、鍼灸師、柔道整復師と連携しメディカルチームを結成、今年6月より本格的に活動をスタートさせる。手始めにフォルトゥナSCに所属する約150人の選手のメディカルチェックを実施、成長過程をチェックしてデータ化するとともに、3者の連携により選手個々に合わせたサポートを行っていく。「この活動をきっかけに、年代を問わず地

域で活動するスポーツクラブの中にメディカルスタッフとして参入できればと思っています」とその目的を語る。

同医院の待合室の壁には、「診心愛語」としたためられた色紙が飾ってある。これは開院当初に書道の先生をしていた患者から贈られたものだそうだが、この言葉が久津問院長の人柄を表している。久津問院長は「スポーツドクターとして地域に受け入れられるのは大変なことです、一度受け入れてもらえると多くの人が頼りにしてくれますよ」と笑うが、真心を持って診療し、愛情を持って語る姿勢が患者に伝わっている何よりの証拠であろう。

#### 【メモ】

医療法人 快療会 くつま整形外科医院  
所在地／〒400-0601 山梨県南巨摩郡増穂町青柳町1136-1  
TEL 0556-22-6688  
FAX 0556-22-4840  
info@kairyoukai.com  
<http://www.kairyoukai.com/>  
診療科目／整形外科、リハビリテーション科  
診療時間／月～土曜日（木・土曜日午後は休診）  
アクセス／JR身延線市川大門駅下車、タクシーで5分  
設備／診察室、レントゲン室、リハビリテーション室、スポーツリハビリ施設